

東教大 教授同士の争い口沼へ

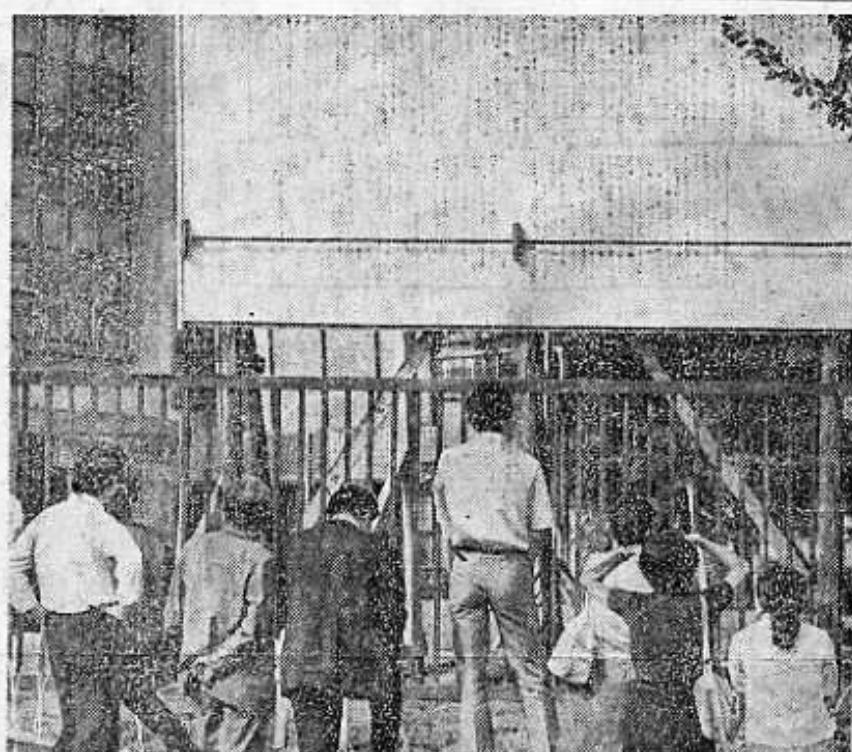
「仮処分」や「弾がい」

授業再開へ 責任のなすり合い

大学当局と学生部教委会の対立が原因で紛争がござる東京教育大(皆島専門長代行)では十八日後、大学当局が「文学部の授業問題がどうなのは文学部教委の責任である」という教育の告示を学内に掲示した。これにたいし文学部教授会(入江勇起・学部長)は「再開できないは大学当局のロッジアウトのため」と反論、「大学当局が行なつてないは学生の入籍問題を放題せよ」という危険な説明を新聞紙に出すと交換封じはじめた。其の結果の責任をめぐって始まった同大の紛争は結構的対立を深めたが、問題を経て、教授間の合意へと至るカレントしている。

現在の東京大紛争は、筑波事の間、三井不動産や大学当局の審査に対する文部省教授会が学生育入、ロッジアウトを放棄、大に回顧、四大講義が月二千學部との協議的対立のミタを深四日に審議部会が正式に決定しためだ。とあるが文部省教授会は九月二十五日を要請して、学生とをもに提訴へ向ったため。二十六日、学生の大糞事件をおそれお詫びしたため、結局、この日出立、講義会の予定得ずにつづけている。

一方に見ると、は「當初は、大學の授業問題を問題視するが、これは学内の授業は問題されなかつた。」これにたいし、官学部では、大学当局は他の学部の長を同様、誤認止めた。掲示はれを追いかけて出されたので、一連の説明を説明するが、その中で、「文部省教授会が「學内の授業問題についての誤認止めた」とあるに「文部省教授会がこのようにして誤認止めた」とある。現在、弁護士と、訴訟方法の具体的問題について商討している。



文部省教授会を「弾がい」する学長告示に見入る学生

ぐるい言鳥島長代行と話し合い、の、争い。は初めて法廷に持ち込まれるとなり、休部、闘争とされ、東京地裁に原告としての決意を語っている。この場合は、東京地裁に原告とする」と、その決意を語っている。これが、文学部と大学当局

22